

1 報告内容の概要

京都府立聾学校舞鶴分校（以下、舞鶴分校）では、平成14年度に開設した通級指導教室の指導・支援を通して、小・中学校で学ぶ児童生徒の学習や生活、人間関係における実態や課題が明らかになった。そのことから、これまで聴覚管理や聴覚補償が中心であった補聴相談に加えて、在籍校での学習や生活に視点を置き、個々のニーズに応じた支援相談（学習支援、心理的ケア、障害理解授業、集団の取組等）に積極的に取り組むようになった。

支援相談では、「勉強がわかるようになりたい」「先生や友達、家族に自分のことを理解してほしい」といった児童生徒の切実なニーズに直面するとともに、「自分探し」の悩みや迷いにも触れることとなった。その中の一人である小学校の途中から通級指導を開始したAさんの事例を通して、学童期から思春期における言語運用の課題や支援の在り方について報告した。

（中略）

2 報告を振り返って

児童生徒の自己理解を高めていくためには、対話的な言語運用の力と書記的な言語運用の力の両方が必要であると考えます。Aさんの場合、小学校時代からの信頼できる大人（通級指導教室担当）との対話や、舞鶴分校での安心でき通じ合える集団での関わりを通じた対話的な言語運用（話す、聞く）と、その都度取り組んできた対話の文章化や自己の障害に関わる作文などによる書記的な言語運用（書く、読む）の機会が重要であった。対話したことを書き言葉にし、書き言葉をもとに対話するといった言語運用の繰り返しが思考力を高めることに繋がったと考える。

また、Aさんの事例では、3つの転換期があったと言える。1つ目は通級指導の始まりである。ここでは、1対1の関係を基盤にした何のプレッシャーもない状態での対話を通して、自分の思いを自分の言葉で表現しながら内面を見つめ直し、整理して考えられるようになった。そのことで、自分が抱えてきた様々な問題は聴覚障害に起因していることに気付いたのである。2つ目は同じ障害がある仲間との出会いである。自分と同じような境遇にある生徒と出会い、わかり合える集団の中での対話と思考の繰り返しによって、自身の障害について客観的に捉えられるようになった。3つ目は、障害理解授業である。障害に向き合う自身の姿や思いを周りの生徒に伝えることで、周りの中学生や高校生が聴覚障害への理解を深め、Aさんの存在を認め受け入れてくれた。そのことがAさんの自信となり、自身の障害を受け入れられるように変容していったのだと考える。人格の基礎を形成すべき思春期において、障害がある生徒の集団と障害がない生徒の集団での言語活動を通して自己への理解を高めていけたことが、希望する進路の実現につながったのであろう。